

阿部知一全集

第1卷

阿部知一全集

第1卷

河出書房新社

阿部知二全集 第1巻

一九七四年七月二十日 初版印刷
一九七四年七月三十日 初版発行

著者 阿部知二
装画 平塚運一

発行者 中島隆之
発行所 株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話(〇三)二九二一三七二一
振替東京一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社
製本 中西製本印刷株式会社
定価は函・帯に表示してあります

目次

日本のじぶしい	7
シネマの黒人	18
美しい跛足の女	30
椅子	45
恋人	49
森林	51
日独對抗競技	64
恋とアフリカ	73
愛のない風景	82
すちいる・べいす	93
樹の話	102
女像	110

化	生	230
美しい海の殺人		226
拳闘選手がくれたモノクル		222
フオテイ・ラブ		219
怖ろしき夜		207
風景とスポオツ		189
蒼い海の秘密		184
円盤とレモン		180
彼等の幸福		164
海の愛撫		161
ヘレン・沼		156
山のホテルで		147
白い士官		128
楕円形のパラソル		121

クラリネットの名人	239
Omnibus	243
運命のネクタイ	246
真　　昼	250
影のある間に	253
神様と釣銭	263
ラグビのやうに	269
悪　　い　　女	273
アフリカのドイル	286
樹木と音楽	300
解　　題	311
舟橋聖一	318

阿部知二全集

第1卷

日本のじぶしい

私はいまになつても、私が十二のときに経験したあの冒険についてわすれることが出来ない。冒險——争闘、漂泊欲、神秘感、恋愛、性欲、残忍性、自然美——こんなものを、一夜のうちに、あの川沿の密林の奥で、まだ青芽のやうな私の感覚に、なまなまと印しつけられてしまつたのだ。今の私のこの意力のない一都会人としての生活と性格は、かんがへてみれば、あの一夜にあらしのやうにゆりうごかされた跡の亡霊のやうな生命の渣であるかもしれない。

*

その夏——私は生れてはじめて大都會の外に出て、北海に面した私の父の郷里に、そこに残つた土地を整理するために帰つた父に伴はれて行つた。

海岸に向つて骨張つた山脈が突出し、その根元のところには、湖と沼沢と、いくすぢかの川にとりかこまれて、周

囲が何十里もある不毛の原野がある。そこに密林と砂丘が、それらの湖沼と川のあひだに交互につらなり、荒々しい日本海の縁までひろがつてゐる。

この原野のうちに点在する村の一つに、父と私は汽車から、馬車、それから川舟にのせられて、都會を出て幾日かののちに着いた。深林につつまれた小山と、ゆるやかな蒼い川と低湿な沼沢とに三方をかこまれた、家数が五十にも足らない村のなかに、古びた石垣を築きあげて、かつて私の祖先が住んでゐた巨きな草屋があつた。庭には真紅の立葵の花が、北国の透明つた夏の光線のなかに輝いてゐた。留守してゐた遠縁のものが、ふだんは開かない広間をひらいた、——そこには朽ちはてた壁に、槍や刀が、赤さびたまま、ちやうど屋守のやうにびつたりとくつついてゐた。——やがて、夜、村の人々があつまつて酒と獣肉と川魚を食つた。はじめのうちは封建的な儀礼があつたが、いつの

まにか、原始的な笑声と悲鳴、唄があり、舞踊があり、淫猥な遊戯があつた。

この××村は、数百年前、西の方からこの曠野に、何等かの理由で移住してきた一隊の貧しい武士たちによつて、土民との争闘と虐使との長い歴史のくりかへしのうちに造られたものであつた。

——しかし、私はこの村の殺伐にして陰惨な年代記を書くかうとはおもはない。又、私自身のうちに流れてゐるべきその争闘の血についても、私の生活を助けてゐるその罪深き財についての感傷的な反省も——。

ただ、私がこれから告げようとするあの冒険について、注意すべきことは、この××村の数百年にわたる掠奪、争闘、——残虐の対象が、とりわけでもある人々に対して向けられてゐたことだ。それはいふまでもなく、密林と沼地の奥に、半ば漂泊し、半ば定住し、——数百年その遊牧的民族性をつづけつつ曠野から、次第次第に内地の大山脈の懷に追ひつめられて行つた一民族である。この山窩族はあるときは可成強盛で、私たちの祖先をも圧迫したが、いつの間にかかれらは哀れなる被迫害民族としておとろへつつあつたのだ。そのうへ、明治時代になつてからは、少くとも表面上には血腥い争闘はあとをたつたがしかし依然として罪惡は暗のうちに行はれた。残忍な私刑、それに対する

復讐、又は掠奪、婦女への襲撃——それらを、現にあの夏に、私は人々が行ふのを聞いたくらゐであつた。多年の遺伝的な憎惡はなかなか消えないのである。——もちろんこの憎惡は、単に民族的な本能的なもののみではない、あの不毛の雪の多い原野に互の生活の糧と繁殖の地面を奪ひ合ふ、きはめて現実的な經濟的争闘の露骨なあらはれでもあつたのだ。

——さて、私はこどもらしく、この村についたあくる日から、村の子供たちの仲間に入つて、この実に美しい、

——都会に育つた私の眼には花の咲いた天国のやうにもおもはれた村の森と川と野をあそびまはつた。だが、この天国にあそぶ小天使たちの遊戯は、いかに地獄的なものであつたことか！ 隣村との石合戦、かれらが戦に應じないときには自らの仲間二つにも三つにも別れて互の争闘心を満足させる。仲間のうちの憎まれたものには、残忍な小私刑を行ふ。女の子供たちをみつけるとかならず荒々しい虐待をしてかれらの涙をたのしむ——この最後のあそびは、のちに知つたことであつたが、あの山窩族の女たちが美しいので、昔から××村の若者たちはその頃までも——時々群をなして襲撃した。その本能的な模倣であつたのだ。

また、あの山窩族に対しては、少年たちはじつにおどろくほどの敵愾心を抱いてゐた。たまたま森のかげにでもか

これらの昨夜の夜営の火のあとでも見つけようものなら、——少年たちはいかなる兵士たちよりも緊張して戦闘準備をする。敵が少ければ、たとへ大人であつても襲撃せんがために。多ければ、あらゆるものを放棄して逃走せんがために。

このやうな自然と人とを背景にしたあの一事件をかたるまへに、私は、例のやうに、この小話の題名に対するよいな註釈をつけることをゆるされたい。本題にかんけいのないこの数行を、多忙な読者たちは黙殺して次にすまれることを私はむしろ望む。日本の演劇の淵源をなす一要素として、古から傀儡族といふものがあつた。大江匡房の日記が、その歌舞に秀た一族について記してゐるところによれば、かれらは日本の国々を放浪し、その皮膚骨格は浅黒くしなやかで、男は鍛冶に、女は美しく華やかな笑をもち歌舞と占易にすぐれてゐる、などとかかれてゐる。私はかつてこれをT・T・博士があるところでした講演できき、ふとジブシイを連想してゐたとき、博士もまた、この傀儡たちはジブシイに関係があるやうにおもはれてならない、といつたのであつた。

*

さて、私はこの村の二十人近いこどもとまじつて、山野

に野性的な遊戯にふけた。この中に乙松といふ十四五のすぐれて野蠻性のつよい少年があつた。そしていつのまにか、彼を中心とした七八人の一隊のギヤングが出来、それは、もはやこの村のなかだけのあらゆる悪戯にあきてしまつた。そして、その遊びは次第にその舞台をひろめ、悪戯の度を深くしていつた。

村の川舟を大人の隙に乗出して、私達はたうとうこの川と沼とを漕ぎながら遠方の野と村とに遠征する快味を味つてしまつた。乙松が首領である、私はいかにも都会に育つた少年らしくも、この乙松の侍童のやうにつきしたがつて、かれらの悪戯に、自分では手を下しはしないが、それをながめることに無限の快感をおぼえながら、この七八人のよりすぐりの悪童たちに最後までつきしたがつて遠征に行つた。時には、そつと乙松を唆かすことすらあつたかもしれない。乙松はまたいかにも、半ば若者になつた野性の少年らしく、私の白く滑かな皮膚と言葉を愛して、あらゆる保護をしてくれたのだつた。

七八人は午後になると川辺にあつまる。(かれらは朝は草刈と牛の放牧にはげしい労働を大人たちから課せられてゐた。午後大人たちのひるねのすきに脱れてくるのだ。)

川舟はゆるやかな流れをゆく。いくすぢにも分れたり出合つたり、急にひろい沼に出たり、急に暗い森林のなかにゆ

きつまる水路を、私たちは全く当もなく漂泊した。はじめのうちは、近くの沼で藁の実をとることがその主な目的であつたがいつまでもそのやうな温順なことをはらなかつた。いつのまにか、私達は純然たる海賊船であつた。

——ああ、その美しい北国の曠野——私は今になつてもこんな詠嘆的なことばを使はないではゐられない。それに少年は、——海賊は、——みな詩人ではないか。

舟はゆるやかに輝く水の上をすべりながら、あるときは葦の中に入つてしまふ。青々とした葦の間に陽がかがやき鳥がとびたつ。ときとすると森の中では水ぎはに狐が水を呑んでゐることがある。空をとぶ鳥のむれ、水のおもてにはねあがる魚。水草の匂。

花のさきみだれた砂丘性の小山や、牛馬の放牧された草原をいくつか廻ると、突然、村が現れることがある。勇敢な少年たちが二三人上陸して瓜や西瓜を盗んでくる。舟のなかでそれをくつてゐるところをその村の少年が発見する。激しい石合戦がはじまる。舟の底に準備した石がなくなるまで血みどろになつて、漕ぎながら石を投げる。ときとすると乙松は単身上陸して逃げそこねた村の子供を捕へてくることがある。私たちは捕虜を、わざと橋のない川の中の島にのこしたりして逃げる。つかれた私達は夕方めいめいの着物をぬいで帆布として、ゆふかたの微風にまかせつつ、

しづかな水路をむらにかへる——わけのわからない凱歌をあげながら。ときとすると、水と空を真暗にして夕立がしぶき、雷が、舟の底に俯してゐる耳元で鳴ることがある。やがて虹、真紅な西の空。牛のなきごゑ。なつかしい村のけむり。水の上にかがやきをめる星。

しかし、額に血をながし、着物を引裂いてかへつてくる少年たちを待つてゐるものは、あたたかな大人たちの笑顔ではない。はげしい体罰と、おそくまでの夜襲。

しかし——その翌日も遠征は行はれる。

こんなにして幾日かがつづき、たうとう最後の悲劇はおこつた。

(この幾日かの間に、私の父の整理はやうやく片附きかけてゐた。この寒村にのこつたわづかの不動産の、取れるべきものは根こそぎとつてしまつて、永久にこの村と縁を絶たうとする父の計画は、都会人のエゴイズムと村の人々の狡猾さとの暗闘のうちに着々と進行した。——連日の酒宴と儀礼とのなかに。そしていま二三日はやくそれが片附いたなら、林の奥の冒険を知らないで帰つたらう。)

そのとりわけて熱い日に、五六人の私達の仲間はいつものやうに川を漕ぎ出したが、その日はどうしたものか少しも面白い冒険もなかつた。かへつて、ある村で瓜を盗むときに仲間の一人を捕へられてしまつたりした。しかし空は

晴れ風はあくまでこころよく吹いた。舟はますます遠く進んでゆく、何かすばらしいことがない以上、私達はどうかへることが出来よう。

いくつかの流をすぎて、私達はまだ来たことのない広い川に來た。両側は松林が眼のかぎりつづいてゐた。耳をすますと、ゆるやかに水の流れる音と、松林の梢の風になる音のあひだに、森林のふしぎな鳥のなきごゑがきこえるばかりだ。夏の白日のうす気味わるい寂寥が私達をつつんでゐた。

つかれ切つた私たちは一言もはなさず、ただ流に任せてこの未知の森林をすすんだ。

その中に夕方きた。黒い松樹の上に一面に星がかがやいた。ぬれた着物を通して私はうすさむさを感じながら、ただ無意識に、水明りの中にただよふ水草の花の匂をかいでゐた。みながだまりこくつてゐた。——それはいふまでもなく激しい空腹のためだつた。掠奪した瓜類は無くなつてしまつた。たへがたい飢渴は原始的な少年にさへ死の幻想をよびおこしたにちがひない。かれらの顔はみな蒼ざめて、ただときどき水明に飛上る魚の白い腹をみつめてゐるばかりだつたから。

もはや漕帰るだけの力もない。風はいよいよ舟を押流す。舟底にねころがつたわたくし達はやがてこのまま海に押出

されてしまふのかもしれない。岸に舟をつけることは危険だ——この森に多い野犬と、蛇と、山窩の恐れがある。

——しかし、乙松は一人舟尾に腰掛けて、たえず周囲をみつづ舵をとつてゐた。飽くことをしらない冒險欲のためであるか、それとも何かの計画があるためであるか、かれは身うごきもしない。「帰らう」といつたものを彼は蹴つた。

しかしやがて、この森の中の舟にみなは泣きはじめた。乙松がしかつてもやめないその泣声は、ごの暗い水の上になふしきな反響をおこしながらひろがつて行つた。

*

やがて、その泣声も飢渴と疲れのために止んだとき、——われわれは死の舟のやうにしづかに夜更の水の上を流れたとき、——とつぜん、乙松の低い叫びとともに、前方の密林の中に火が見えることが発見された。チラチラとほのめく真赤な焚火のやうなものが。

半ば死人のやうに舟底にうづくまつてゐたみなは思はずよろこびの叫びをあげたが、やがて乙松の恐ろしい顔と制止によつて、ふたたび力を失つてしまつた。乙松はいつた——あれは山窩にちがひない。もし万一にも私達の村に好意をもつ一隊であつたならば、(さまざまの部落は各の利

害関係から特別の同盟を結んでゐることもあつたから）そこに行つて食物を乞ひ、村におくりかへしてもらつても、そこに泊めてもらつてもいい。だが、もしそんな一隊でなかつたら、私達は発見せられないうちに逃げなければならぬ。——しかし、さきほどの叫声でもはや敵は氣附いてゐるであらう。もちろん、極度に小人数か、女子供だけであるならば襲つて食物をうばつてもいいが、今のわれわれの弱さではだめだ。ただ、夜がふけるまで隠れて、食物を盗む外はない。

舟はそのうちに岸につけられ、私達は無意識的な好奇心も手伝つて棘に引裂かれながら息を殺して森の奥に入つて行つた。

松の林の中の砂地に小さな掘立小屋が四つほどかたまり、その中の広場に赤々と火がもえてゐたのだつた。かれらは、——二三人の男（老人）と七八人の女と子供ばかりであつたが——魚を焼きながらしきりになにか声高にしゃべつて食事してゐた。そのうちに私達の隠れてゐるところと反対の側から、若い男が二人歸つてくると、酒がのみはじめられた。やがて皆が歌を唄ひ出した。わけのわからない怪げな節につれて、踊り出すものがあつた。私達は魚のやける匂が流れてくるところまでも近づいて、飛び出したくなる欲求と、恐怖とに身をふるはせながら、木の根や草はらに

隠れてゐた。

いや、も一つ、身をふるはせたものがあつたかもしれない。その群の中にうたひ踊つてゐる一人の娘があつた。そのふしぎな魅力はわたくしたち少年にまで感じられた。私だけではない、みな、眼を光らせてゐる——最も前に、餌をねらふ豹のやうに身がまへてゐる乙松の肩までふるへてゐる。

そのとき、——猛獸のやうなうめきとともに「ギャッ！」といふ悲鳴が後でおこつた。ふりむく途端私は仲間の一ばん後から覗いてゐた少年がバツタリ倒れるのと、まつ白な巨きな犬がかれに飛かかるのをみた。——いや、それをみたと思ふ瞬間、たくましい男が、後から四五人あらはれて私達をかこんでしまつた。背後から首をしめられた私は、眼の前に乙松がだれかと格闘してゐるさまと、焚火の方からまつしぐらに飛んでくるあの娘との幻影が重なりあつたかと思ふと、大きな花のやうな模様がギラギラと暗にきらめいたまま、——すべてがまつくらになつてしまつた。

次に正氣にかへつたとき、私達はみな小屋の近くの松の木に裸でしばらくつけられてゐた。松の木の皮が身を切るやうに痛く感じられた。乙松だけでなくみなが身体の所々から血を流してゐた。かれらは、——この捕虜に喜びを百倍

して踊り狂ひ飲んでゐた。子供たちはしばらく私達の前に来て「アカンベ」をしたり魚の骨をなげたり、小便をかけた。私達から剥ぎとつたきものを女たちは火にすかしてみてゐた。私のきものを取合つてゐるのもみえた、——町で出来たいい着物であつたからであらう。猛犬がうづくまつて、私達が一寸でもからだを動かせば噛みつきさうにかまへてゐる。さきほどその犬に飛かかられた一人は死んだやうに砂の上に投げ出されてゐた。空腹と痛さにとさどき氣を失ひながら、私はこの噪宴をみた。娘の美しさをみつめてゐた。すべてが夢のやうだつた。

乙松は——さきほど「坊ちゃん、殺されるかもしれないぞ！」と私にささやいて呉れた彼は——少しはなれた木にしばらくつけられたまま、さすがに微笑さへうかべて、悠然と觀念してゐた。しかし、たのもしくおもひながら彼をとさどき見守つた私はふしぎなことに、——彼の眼が一点に注がれるのをみた。そして、それが、やつぱりあの娘であることをしつた。

私達がときどき発する獸のやうな呻きと、かれらの噪がしい歌と、異様な形の男女の動作と、煙と火と森の木のふしぎな影のなかにあの娘の碧色にすら光る眼と、赤い唇と、細長い肉体が、夢魔のやうに美しくしびれた私の感覺をそそつた——それを乙松もみつめてゐる。私は、——こども

であつた私は、実におそろしい憎惡と嫉妬をすら乙松にかんじた。

やがてかれらの噪宴はをほつた。人々は、今一度私達に砂をかけ、蹴つて小屋に入つて行つた。若い男の一人がその娘の肩を抱かうとして、二三人の間に殴り合がおこつたが、やがてそれも朗かな笑声となつて、焚火のかげに人影はなくなつた。火もひとりでに消えて行つた。犬だけがうづくまつてゐた。

娘も一人の老人に伴はれてある小屋に入つた。

しづかになつた。いつの間にか、黒い森林の上に半月が上つてゐた。川の水が、木々の間から微に光つてゐた。川には又、魚をとるために赤い火が一つ光つてゐた。その外のすべては黒い沈黙だつた。——私はそのうちに氣が遠くなつてしまつた。

*

しばらくたつたのかもしれない。私は冷氣のために再び氣がついた。月光が明るく縞のやうに茂みの間から降つてゐた。ただ一人眼覚めてゐる乙松に話しかけようとしたとき、——犬が身を起した。私達はたゞ眼を見合せる外のことは出来なかつた。

そのとき、一つ的小屋から黒い人影が出た。私は又一つ

の迫害を予想しながら戦慄した。しかし——人影は女だった、あの娘だった。彼女は忍び足でまづ犬のところにきて抱くやうにしながら何か食物をあたへた。それから、——あの眼が、踊りながら碧く光った眼が、ときどき私の方をみてゐた眼が、——私に向けられた。次の瞬間、私は娘の手の方にあつた何物か、あまりの空腹のため、私はそれが何であつたかも知らなかつた——ただ生臭い肉のかたまりのやうなものを食つてゐた。それから、娘に、眼で、乙松の方を差した。娘は笑つて首をふつた、私がしかしあまり乙松の方を指さすので、彼女はたうとう乙松にも少しを分けることを承知した。

しばらく彼女は、犬を抱きながらガツガツと食つてゐる二人を笑ひを浮かべながらみつめてゐた。やがて、身をひるがへして私にちかづいて、——私の鼻をつまんだり、指を折り曲げてみたり、耳を引張つたり、——ちやうど珍らしい小動物をはじめて愛玩する小供のやうになぶりまはした。しかし、それがまた快感を私にあたへたのだ。私はいつまでもこの玩弄がつづくことをのぞんだ。息のつまるやうなよろこびが、こんな野蛮で残酷な愛撫にあつたのだ。

しかし、彼女は、又身をひるがへして、森の中に消えて行つた。彼女は木立の間を川の方に走つた。

……やがて、月光と、漁火の二様の光線の微な交錯に反

射する水の面に、私は美しい女の裸身をみた。樹々のかげに、その裸身はあるときはその手だけを、あるときは上半身を、あるときは下半身を——青白くけぶらしながら輝かせた。水にぬれた胸と肩に月光と漁火がかはるがはる蒼白色と赤色の光線を投げた。

この美しい光景は、しばらくして私の眼からきえた。娘はまもなく、衣物をつけて、又私の方に来た。私はまた、水にぬれた、——水草と魚の匂のする彼女の腕に弄ばれた。

乙松は——かれはこの間終始、呻きのやうな声を発して娘のすべての光景を追つてゐたことを私は知つてゐた。娘がやがて、小屋に入つてしまつたあとで、彼は、私を憎悪に燃えた眼で睨んだ。

しかし、また静寂にかへつた。満腹と快楽とが私をまたウトウトとまどろませた。そのまどろみも、しかし、長いことではなかつた。——とつぜん、私の荒縄が放たれたことを私は感じた。暖かい腕がよろける私の身体を支へた。父の腕だ！ 思はず声をあげようとする私の口を押さへながら私の父は、私を抱いたまま川の方に急いだ。そこには、もはや助けられた少年たちをとりかこんで村の人々がゐた。竹槍と刀をもつた数十名の男の人は、私達少年を舟に入れると、父と三人の若者をのこして、森林の奥に進んで行つた。